# こたつで一息ようやく

## 長野市赤沼の夫妻 避難所から「みなし仮設住宅」へ

## 自宅戻れる日 愛猫と心待ち

ルポ 千曲川氾濫

入居したみなし仮設住宅で愛猫「くろみつ」と一息つく山田さん夫妻＝30日午前11時７分、長野市稲葉母袋

台風19号の被災者が身を寄せる長野市内の避難所の統合が迫る30日、公営住宅やアパートを借り上げる「みなし仮設住宅」に引っ越す人が目立った。市によると同日朝の避難者は212世帯480人で、仮設住宅への入居が始まる1日はさらに減る見通し。同市吉田の長野運動公園で過ごしてきた山田仁英さん(69)、ゆき子さん(66)夫妻は、愛猫と暮らせる同市稲葉母袋のアパートに移った。全壊判定を受けた同市赤沼の自宅の改修が終わるまでの仮住まい。戻れる日を心待ちに、こたつで一息ついた。

「くろちゃん出ておいで」。30日午前11時ごろ、2DKのアパートに移ったゆき子さんは、居間のこたつで丸まる雄の愛猫「くろみつ」を呼んだ。隣には仁英さん。一家の日常が1カ月半ぶりに戻った。

千曲川の堤防が決壊した10月13日未明。夫妻は大阪市内の長女真理亜さん(35)宅を訪れていた。テレビで長野市の惨状を見た仁英さんは「まさかここまでとは」。16日に戻った木造2階建ての自宅は泥まみれ。高さ2・2メートルまで水に漬かっていた。家具は散乱。足の踏み場はない。慌ただしく長野運動公園に移った。

避難所では食事や風呂が用意され、気心の知れた近隣住民もいた。ストレスや不満はそれほど感じなかった。ただ、避難所に連れて行けず、市内のボランティア団体に預けることになったくろみつが「心配で仕方がなかった」と仁英さん。自宅の片付けは親族やボランティアの協力で10日ほどで済ませ、猫が飼えてすぐに入れる借家を探した。

10月末には決めた。11月中旬に鍵を受け取ると、使えなくなった家具やペット用品の新調に動いた。家電量販店やホームセンターを巡り、少しずつ部屋に搬入。引っ越しは、当初避難所閉鎖のめどとされた30日にした。

仁英さんは飯山市出身。豪雪を敬遠し、40年余り前、一家で赤沼に移った。再び自然の猛威を思い知らされた。今後、二度と水害が起きないとは限らない。千曲川から離れるかどうか悩み、夫妻で話し合った。真理亜さんら娘2人は独り立ち。年金暮らしの事情も踏まえ、赤沼をついのすみかと決めた。負担はあるが、ちょうど古くなった家の改修のためと思うことにした。ゆき子さんは「あと10年、20年も住めればいいから」と言う。

引っ越して1時間ほどたった30日午前11時すぎ、宅配便の段ボール箱が届いた。猫用のおもちゃやおやつ、サツマイモなどがぎっしり。同じく猫好きという、真理亜さんの友人が送ってくれた。「ありがたいね」とゆき子さん。支えてくれる人の優しさが染みる。

夫妻には今、心待ちにしていることがある。自宅の改修が終わる予定の来年夏。片付けを手伝ってくれた親族や物心両面の支援をしてくれた知人を招き、もてなして感謝の気持ちを伝えたいと思い描いている。寒い冬を越し、春の喜びを感じ、暑さをしのぐ頃になりそうだが、仁英さんは「前向きな二人だから何とかやっていけるはず」と考えている。

（難波 淳）

## 県、陸自部隊に撤収要請

県は30日、長野市からの連絡を受けて台風19号の被災地で活動していた陸上自衛隊の災害派遣部隊に撤収を要請した。同日午後10時時点で、知事が要請していた活動が全て終了したため。

県は10月12日に、河川氾濫や孤立地域での人命救助のために陸上自衛隊に災害派遣を求めていた。活動は50日間に及んだ。

# 復興願って 光のメッセージ

## 長野 南長野JCが点灯式

「がんばろう！長野！」の応援メッセージも浮かび上がったイルミネーション＝30日午後6時24分、長野市篠ノ井東福寺の南長野運動公園

長野市の南長野青年会議所（JC）は30日、同市の南長野運動公園で12年目となるイルミネーションの点灯式を開いた。今年は台風19号で地元の市南部も被災。中止も検討したが、被災者を元気にしたいと当初から約1カ月遅れで始めた。復興を願い、電飾に「がんばろう！長野！」の文字を掲げた。25日までの午後5～10時にともす。

今年は11月3日に開幕予定だった。被災した会員もおり、会員の多くがボランティア活動に打ち込む中、「イベントどころじゃない」との意見も多く延期。そのうち住民や地元企業から「中止にしちゃうの」「復興に向けて盛り上げて」との声が寄せられ、議論を重ねて開催を決めた。

テーマは「未来（あす）への橋を架けよう～復興の光を灯（とも）す」。市南部の小中学校や高校計26校の児童生徒に作ってもらった折り鶴計約8千羽も飾った。点灯式で宮崎弘章理事長(40)は「心が温かくなっていただけたらいい」とあいさつ。同公園体育館で家族と避難生活を送る女性(36)＝篠ノ井小森＝は「きれいで元気づけられる。やってもらえて良かった」としみじみ眺めていた。

# 果樹園再生 寒さに負けず

## 中野 農業ボランティア初日

小林さん(右)のリンゴ畑に残った泥をかき出すボランティアの人たち＝30日午前10時半、中野市上今井

ながの農協（本所・長野市）と中野市農協、中野市は30日、台風19号で浸水被害があった同市内の果樹園でごみや泥を除去する「信州なかの農業再生復興ボランティアプロジェクト」を始めた。初日は約100人が参加。寒空の下、スコップなどで懸命に泥をかき出した。

同市上今井にある小林稔さん(77)のリンゴ畑約10アールでは、ながの農協職員の服部昌史さん(40)＝飯山市＝らが「寒いけれど動くと温まる」と話しながら泥をかいた。果樹園での作業は初といい「重くて大変。人手が必要と痛感した」。

中野市では桃やリンゴなど果樹生産が盛ん。泥が根元にたまった状態が長く続くと木が枯れる恐れがある。ボランティアは1日以降も午前9～10時に同市豊田支所で受け付ける。ながの農協の担当者は「SNS（会員制交流サイト）も活用し、多くの参加を呼び掛けたい」としている。